

セーニヤ・フレシンその他主要メンバーが逮捕された。(The Russian Anarchists
by Avrich P222 参照)

*₁ クロンシュタット

ストライキは、極端な手段がとられたにわかかわらず拡がりつづけた。逮捕につづく逮捕、当局のまづい状況処理で暗い分子が勇気づけられる次第でした。反革命、ユダヤ虐待の宣言文が現われ、軍隊による制圧の噂や罷業者に対するチエーカの暴虐が街に溢れました。

労働者は固い決意をもっていたが、飢えのため屈服するのは明白でした。公衆は労働者に何か与え、ストライキを助けたくても方法がなかった。工場地帯へ通じる街路は軍隊によって遮断されているのです。その上、誰もが窮乏していた。わたし達が集め得た食料や衣料は大海の中の一滴でした。独裁と労働者の間にある反目は、罷業者達がこれ以上長びくストライキを続けても平坦にならないと思われました。

こうした緊張と絶望的な状況の中に、解決のきざしをもった新しい要素がもちこまれた。それがクロンシュタットの水兵達です。

革命の伝統と労働者への連帯に忠実で、一九〇五年の革命では忠誠を示し、一九一七年三月と一〇

月の動乱では、ベトログラードの繋がれたプロレタリアートの為に再度、抵抗したのです。彼等は盲目的にやったのではなかった。物静かにしかも部外者に察知されず、罷業者達の要求調査に委員を派遣したのです。その報告書が軍艦「ベトロパヴロフスク」号と「セヴァストポール」号の水兵達を起ちあがらせ、ストライキをしている労働者のために決議を採択させたのでした。彼等は革命とソヴェト並びに共産党に忠誠を捧げると公表した。しかし、幾人かの革命委員の気ままな態度には抗議し、労働者組織の自決の必要性を強調したのです。更に労組及び農民組織の集会の自由、またソヴェトの刑務所と収容所から全労働・政治犯の釈放を要求しました。

これらの諸組織の例をクロンシュタットに定泊中のバルチック艦隊、第一、第二団がとりあげたのです。五月一日(一九二一年)の青空集会は一万余名の水兵、赤軍兵士、クロンシュタットの労働者が反対投票を除き、同じ決議をほぼ満場一致で採択しました。反対者はクロンシュタットソヴェトの長官ヴァシリエフ、彼はこの集会の議長を勤めた。バルチック艦隊革命委員クズミン、社会主義ソヴェト連邦共和国議長カリーニンでした。

集会に出席した二名のアナキストが戻って、わたし達にその際に秩序がたまたれ、熱烈で立派な精神が溢れていたと誇りました。十月の日々の初め以来、さような連帯と激しい友愛の自発的示威をみたことがないということでした。もしわたし達がその場に居合わせたのだったらと嘆きました。

クロンシュタットの水兵達は、一九一七年サーシャがカリフォルニアへ引渡される危機の際、強力に起ちあがって呉れたし、わたしは水兵達によく知られているのだから、そこに出席していたら、あの決議に重みを加えたらうと言うのです。わたし達も機械で作ったのではなく、ソヴェトの地で行なわれた最初の大衆集会に参加できたら、それは素晴らしい経験だったろうと同意しました。マキシム

・ゴーリキ（作家・劇作家一八六八—一九三六—訳註）がずつと以前、バルチック艦隊の水兵は生まれるながらのアナキストで、わたしの住む所は彼等の間にあると保証したものです。長い間、わたしはクロンシュタットへ赴き、水兵達と会って話したかったが、心の乱れた状態では建設的意見は述べられないだろうと思った。けれど今は彼等の許に就くのだ、むしろボルシェヴィキは体制に反対するようわたしが水兵をけしかけると非難の声をあげるでしょう。サーシヤは共産主義者が何んと言おうとかまわぬ。ペトログラードの労働者のストライキのため、抗議では水兵の側に参加すると言いました。

わが同志達は、罷業者と共にいるクロンシュタットの側に同情を表明するのは、決して反ソヴェト行為とは解釈されない。事実、大衆集会での水兵の精神と通過した決議は、完全にソヴェトの人間のものである。彼等は飢えている罷業者に対するペトログラード当局の専制的態度には強力に反対しているが、いつの集会でも共産主義者に反対を表明したことはない。事実、あの大集会は、クロンシュタットソヴェトの主催で開かれた。水兵達は忠誠を示すため、カーリーニンが市に到着した時は音楽と歌で迎え、彼の話は敬意と注目を受けたのです。カーリーニンとその同志が水兵達を攻撃し、決議を非難しても、カーリーニンは停車場まで友好的に見送りを受けた：と報告者が語りました。

わたし達は、艦隊、守備隊、労働組合ソヴェトから三〇〇名の代表を集めた集会で、クズミン、ヴァシリエフが水兵達に逮捕されたという噂を聞いた。わたし達が同志に確しかめると、先の二人が拘留されたのを認めた。理由はクズミンが水兵達を裏切り者、ペトログラードの罷業者を Shkurinsky 更に共産党はへ彼等を反革命者として最後まで戦うと宣言したからとのことでした。代表者達はまた、クズミンがクロンシュタットからすべての食料と弾薬を撤去し、市を文字通り飢死させるよう

命じたのも知ったのでした。そこでクロンシュタットの水兵と守備隊はクズミンとヴァシレフを拘留し、街から補給が撤去されないよう注意を払った。けれど何らの反抗の意志を示すものはなく、共産主義者の革命的誠実を信じつづけたのです。それどころか共産党の代表は集会で他の者と同じだけ発言が許されていました。更に彼等の体制に対する信頼を示すものとしては、三〇人委員会をペトローソヴェトに送り、ストライキの好意的解決にあたらせたことです。

わたし達は、クロンシュタットの水兵と兵士がペトログラードの罷業者に連帯したのを得意に覚え水兵の介入で騒ぎは早急に解決するよう希望しました。

わたし達の希望は一時間で打砕かれた。クロンシュタットからのニュースを受けとったのです。レーニンとトロツキーが署名した命令書は、ペトログラードを野火のように駆け抜けた。それはクロンシュタットがソヴェト政府に反乱を起したとして、水兵をへプロレタリア共和国に対し、反革命を提起した社会主義革命者と組む、旧帝制の將軍共の小道具とときめつけたのです。

「馬鹿げている！ 気狂い沙汰だ！」サーシヤは命令書の写しを読んで叫んだ。

「レーニンとトロツキーは誰かに誤報されているんだ。水兵に反革命の罪があるなんて信じてはいないだろう。だってペトロボヴロフスクとセヴァストポールの水兵達は、十月革命以来、ボルシェヴィキの誠実な支持者じゃないか。トロツキーは自分であの人達を『革命の誇りであり、花だ』と挨拶したじゃないか！」

すぐモスクワへ行かなければならん：とサーシヤが言った。レーニンとトロツキーに逢って、それが酷い誤解で、革命自体に致命的な失敗になると話そう。サーシヤには、全世界の何百万ものプロレタリアートの司祭と思われた人達の、革命についての誠意を、信頼できないとは思えなかつたのです。

わたしは、クロンシュタットの詳細な報告を、クレムリンに毎晩電話しているツノヴィエフによって、レーニンとトロツキーが誤らされているのだというサーシャに同感でした。ツノヴィエフは同志の間でも個人的勇気で名を成していない。彼はペトログラードの労働者が示した不満にあわてふためいたのでした。地方守備隊が罷業者に同情を表明したと判ると、頭にきて、自分が起居しているアストリアホテルに機関銃を配置させたのでした。クロンシュタットが起ちあがると恐怖に駆られ、モスクワに、あることないことを言い触らしました。わたしはそうした経過をよく知って居、サーシャも同じでしたが、レーニンとトロツキーがクロンシュタットの人びとは本当に反革命で、レーニンの命令書が言うように、白軍の將軍連と協働できると考えはしまいと信じていました。

全ペトログラード地区に特別戒厳令が敷かれ、特別許可をもらつた公務員以外の出入りが厳禁された。ボルシェヴィキの新聞は、悪罵と中傷のキャンペーンを開始して、水兵と兵士がへ皇帝派將軍、コゾフスキーと盟約を結んだと公言し、クロンシュタットの人びとを無頼漢だと言うのです。サーシャはこの状況には、レーニンとトロツキーの側に単なる誤報以上のものが含まれているのを知り始めました。トロツキーはペトロソヴェトの特別会議に出席し、クロンシュタットの運命を決めるといふ。わたし達は出席することにした。

ロシアでトロツキーの話を書く最初の経験です。わたし達はニューヨークで彼の別れに際しての言葉を想起しました。彼が述べたのは、わたし達にロシアへ来て、帝制打倒の偉業を手伝って欲しいとのことでした。だとすれば今、わたし達がクロンシュタットの困難を同志の精神で解決し、わたし達の時間とエネルギーを捧げ、否生命すら捧げてでも救援したいと彼に訴えよう。何故なら革命が共産党に課した最大の試練だからです。

不幸にもトロツキーの列車は遅れ、会議に間に合わなかつた。そこに出席した人びとに呼びかけた人達は理性と訴えかけをもっていなかつた。狂気にとりつかれた狂信がその言葉にあり、盲目的な恐れが心を占めていたのです。

演壇はクルサンテイが重々しく囲み、チエーカのカの兵士が聴衆との間に銃剣をつけ立っている。議長になつたツノヴィエフは神経的に参る寸前でした。何度も話そうと起つては、また坐るのです。最後に話し始めた時などは、頭を左右に振つて何か突発の攻撃を避けるかのように、その声はいつでも思春期のように細いのが、ここでは金切声になり、喚めくだけで説得に欠けていました。

彼は「コゾロフスキー將軍」をクロンシュタットの人びとの悪霊だときめつけた。しかし聴衆は將軍がトロツキーによつて、砲術の専門家としてクロンシュタットに配置されたに過ぎないのをよく知っていました。コゾロフスキーは老年で老衰して居、水兵や守備隊に影響力をもっていない。ツノヴィエフにはそれは問題じゃない、特に創出された防衛委員会の議長として、クロンシュタットが革命に反対し、コゾロフスキーとその帝制派の一味が計画を實行しようとしていると言いたるのです。カリニンはいつものようにおぼあさんみたいに応揚で、悪い言葉で水兵を攻撃し、数日前にクロンシュタットで歓迎されたのは忘れていました。へどんな手段でも、光栄ある革命に反対の手をかす反革命者には、敵しすぎるといふことはない、と彼は言つた。同じ調子の演説がつづき、共産党の熱狂者達は、事実には無知で、昨日まで英雄で同志であつた人びとに狂気じみた復讐を述べたのです。

絶叫と取捨のつかない群衆の中で、一つの声が聞いて貰おうと努力していた。最前列にいた男の力強い真面目な声でした。彼は兵器工場でストライキをやっている雇員の代表でした。彼は勇敢で忠実なクロンシュタットの人びとに対し、演壇から叫ばれる誤解に対し抗議したのです。ツノヴィエフに

向い指を立てて、その人は言った。

「君や君の党の無関心がわし等をストへと駆りたて、水兵諸君は同情して起ちあがったのだ。革命では彼等はわし等と一緒に闘った。彼等に何の罪もないのは君だつてよく知っている。それは君の悪意で、それがあの人達の破滅を呼びかけているのだ」

「反革命！」「裏切り者！」「メンシエウイキの悪党」の叫びがあがって、会場は混乱した。年老いた労働者は立つたまま、声をはりあげた。

「三年前だか、レーニン、トロツキー、ツノビエフの諸君は、裏切り者であり、ドイツのスパイと罵られた。わし等、労働者や水兵達が諸君を救い、ケレンスキー政府から救出したのだ。諸君を権力の座に就けたのは、わし等なんだ。お忘れかね。ところが今は、諸君がわしらを銃剣で脅かすのだ。覚えておきたまえ。諸君は火遊びをしている。諸君はケレンスキー政府（革命臨時政府・アレキサンドル・フェドロヴィッチ・ケレンスキー）は一九一七年革命政府の首相を勤め、ボルシエウイキに破れ一九四〇年以來米国に在住（訳註）のやつたと同じ悪罵と犯罪を繰返そうとしているんだ。同じ運命にならないよう注意したまえ」

この挑戦にはツノヴィエフが縮みあがった。演壇上の人びとも不安気だった。共産党の聴衆は一瞬力強い警告に恐れをなした。その時、別な声があがった。水兵服の背の高い男が後列に起ちあがったのだ。彼は水兵達の革命精神を変えるものは何もないと宣言しました。最後の一兵まで、革命を擁護し、最後の血の一滴まで闘う。次いで彼は五月一日の大衆集会で採択されたクロンシュタットの決議文を読み始めた。騒ぎで彼の周囲の人びとにしか内容は聞きとれなかった。けれど彼は最後まで読みつづけたのです。

革命の堅固な二人の息子達への答えは、全員排除を代償に、クロンシュタットの完全な即時降伏を要求したツノヴィエフの決議でした。大混乱の最中、その決議は反対の声を無視して駆け抜けたのです。

感情と憎悪のヒステリーに犯された雰囲気は、わたしの内部に入りこみ、喉元を押えました。その夕方は偉大な理想の名において、最低の政治的術策に人を付すあざけりに対し反対の声をあげるつもりでした。でも声がでず、一言も発声できないのです。わたしは、復讐と憎悪の精神があばれ狂った別な機会を想起しました。一九一七年六月四日、ニューヨークのハント・ポイント・パレスで反徴兵の夕べのことです。あの時は、戦争に酔った愛国者達による危険にもかかわらず、発言できました。だのになぜ今できないのだろうか？ ウードロウ・ウイルソンがアメリカの若者を軍神モーロクに捧げようとした時、わたしがやったと同じ反対を、ボルシエウイキによる兄弟殺しに際して、できないのだろうか。あらゆる不正と悪に対し、長年闘ってきたわたしの勇気を失ったのだろうか。それとも無気力がわたしの意志を駄目にし、生きる力になっていったものが幻影にすぎなかったのを知って、心に住みついた絶望によるのだろうか。その打砕かれた意識を変えるものは何もなく、甲斐ある反論はできませんでした。

脅迫する殺人者の顔に現われた沈黙もまた耐え難いものでした。でも他の人達と違って、わたしはとりつかれたため声がでなかったのではない。その夜、ソヴェト防衛委の権力へ宛てた声明書でわたしの立場を明らかにしました。

わたし達だけになって、わたしはサーシャにその事を話しました。わたしは同僚が同じ計画を考えていたのを知り嬉しかった。わたし達の手紙はペトロソフエトによって通過された殺人の決議に関

連して共同の抗議声明になる筈でした。あの会議に出席していた別の二人の同志も参加して当局宛てのメッセージに署名しました。

わたしは水兵達に対して宣せられた事件の経過に、わたし達のメッセージが重大な何か抑制的效果をもつとは希望できなかった。でもわたしは、共産党が革命を裏切るのに、沈黙している側にいたのではないことを、将来明らかにする証拠として、自分の態度を記録しておこうと決心したのです。

午前二時、サーシャはツノヴィエフと電話連絡ができた。彼はクロンシュタットに関連して、重大なことを伝えたいと言いました。ツノヴィエフはクロンシュタットに対する反逆を助ける何かと勘違いしたのでしよう。でなかつたら、サーシャとの話し合い後、十数分たった夜中のあの時間に、ラヴィツチ夫人を寄こすような手間はかけなかつたことでしょう。彼女は信用できるから、メッセージを渡すようにとの書付けを持っていた。わたし達は次の一文を手渡しました。

ペトログラード労働・防衛ソヴェト 議長ツノヴィエフ殿

現在、沈黙を守るのとは不可能であり、また犯罪でさえあります。最近の事件は、われわれアナキストに発言と現状における態度を鮮明にするよう求めています。

労働者並びに水兵の中での顕著な騒じょうと不満の時流は、われわれの真剣な注目を要するところです。思うに寒さと飢餓が不満を呼び、討議や批判の機会のないことが、労働者並びに水兵をして、その苦悩を無為に誇示させている

のでしよう。

白軍はこの不満を自己の階級利益に利用しようと望み、試みるのかも知れない。労働者と水兵の背後に隠れ、選挙同盟、自由商業、その他のスローガンを投げつけるのです。

われわれアナキストは、これ迄そうしたスローガンの虚偽をあばき、全世界に向つて、われわれが如何なる反革命の企図に対しても武力で闘い、社会革命の全友人と協働し、ボルシェヴィキと手をとりあうことを闡明してきました。

ソヴェト政府と労働者並びに水兵の軋轢は、武力によってではなく、同志的友愛の革命者の同意でもって、解決されるべきだと考えます。ソヴェト政府側において流血に訴えるのは―この現状では―労働者を脅迫することではなく、静めもしないのです。それどころか、事態を悪化させるだけであり、協商派を助け、内部における反革命の手を強化することになりましょう。

更に重大事は、労働者・農民の政府が、労働者並びに水兵に対し、武力を行使すれば、国際的革命運動に反動的効果をもたらし、至るところで、社会革命に計り知れない害を招来しましょう。

ボルシェヴィキの同志諸君、手遅れにならぬうちに考慮し給え。火を弄んではいけない。諸君は最も重大且つ決定的な一步を踏みだそうとしているのだ。

われわれは、ここに次ぎの提案をする。二名のアナキストを含む五名から

成る委員会を選出すること。この委員会は、クロンシュタットへ赴き、平和的手段で争議の解決にあたる。現状ではこれがもっともラジカルな方法である。

また国際的革命者の意味を担うてありましよう。

ペトログラード・一九二一年三月五日

アレキサンダー・ベルクマン

エマ・ゴールドマン

バーカス

ペトロフスキー

署名

わたし達のアツピールがつんぼの耳に落ちたのは、トロツキーが到着して、クロンシュタットに最後の通牒をつきつけたその日に判りました。労働者と農民政府の命令により、彼はクロンシュタットの水兵と兵士に宣言しました。社会主義の祖国に手をあげる者は、すべて山鳩のように射殺する。反乱する艦船及び乗組員は、直ちにソヴェト政府の命令に帰順するか武力によって屈服せしめられるであろう。無条件で降伏する者のみ、ソヴェト共和国の恵みをあてにできるのだ。

この最後警告は、革命軍事ソヴェト議長としてトロツキー、赤軍総司令官カメネフが署名していました。支配者の神権にあえて質問するのは、再び死によって罰せられるのです。

トロツキーは言葉を守った。クロンシュタットの人びとによって、権威へ引きあげられた彼は、ロシア革命の誇りであり栄光である者に対し、今や負債を支払う地位にいたのです。ロマノフ王朝時代の最良の軍事専門家と戦術家が彼の命に従い、その中から有名なトカチフスキーをクロンシュタ

ット攻撃の司令官に任命したのです。その上、三年間人殺しの技術を訓練されたチエーカの集団、命令には絶対服従のクルサンテイと共産黨員、更に各戦線から信頼できる軍団を召集しました。さような戦力に対し、反乱した都市は容易に屈服する筈でした。特にペトログラードの水兵と兵士が武装解除され、包囲された同志に連帯を表明した人びとは危険地区から排除されてしまったのですから……。

インターナショナル・ホテルのわたしの部屋の窓から、武装解除された守備隊の人びとが小さなグループになり、チエーカの強力な分遣隊に囲まれ、連行されるのがみえました。あの人びとの足取りは重く、両側に腕を垂らして、悲しみの頭を下げたままでした。

ペトログラードの罷業者達は、もう当局から恐れられていなかった。彼等はゆるやかな飢えて弱わり、活力は奪われていた。自分達とクロンシュタットの兄弟達に向けられた嘘で駄目にされ、ボルシエウイキの宣伝がしみ込ませた疑惑の毒によって精神が壊されてしまったのです。彼等のために自己犠牲でもって起ちあがり、生命を捨てようとしているクロンシュタットの同志達を助ける闘争とか信頼がもてなかつたのです。

クロンシュタットはペトログラードから見捨てられ、ロシアから切り離されてしまった。孤立したのです。ほとんど何の抵抗もできなかった。最初の一発で陥落するだろう。ソヴェトの新聞は言っていた。だが間違いである。クロンシュタットはソヴェト政府に反乱するとか抵抗することは考えていなかったのです。最後の瞬間まで一滴の血も流さないことを決意していました。いつまでも理解と友愛の解決を訴えました。だが不当な軍事攻撃に対し自衛を強いられると、獅子のように闘ったのです。悲惨な十日間、昼夜の別なく、包囲されたこの街は、三方からの連続砲火と非戦闘員の市民の頭上に落ちる飛行機からの爆弾に抗して守り抜きました。彼等は英雄的にボルシエウイキの繰返す攻撃を押

しかえし、モスクワからの特別軍団が守る保塁まで襲撃したのです。トロッキーとトカチエフスキーはクロンシュタットの人びとに比べ優位でした。共産国家の全武器が彼等をバックアップし、集権化された新聞は、十分な証拠もないのに「反乱者と反革命者」との毒舌で絶えず宣伝するのです。彼等は無制限な供給を受け、意表を衝くクロンシュタットの人びとの夜間攻撃を避けて、フィンランド湾の凍った雪と見まがう白い偽装をつけていました。他方クロンシュタットの人は、不屈の勇氣と自己の運動の正義の確信、独裁からロシアを救出するチャンピオンとして自由ソヴェトを信じる他なにもなかったのです。彼等には共産主義者である敵の攻撃を留める氷割り機さえなかった。飢えと寒さと氣くばりで眠れぬ夜のため憔悴していた。それでも押しかむさる大波に対し絶望的な闘いをいどみ、守り抜いたのです。

不安な未決の間中、夜も昼も重々しい砲撃がつづくうち、銃声の中で反対の叫びはあがらず、恐るべき血の河を止める呼びかけは聞えなかった。ゴーリキ、あのマキシム・ゴーリキは何処にいたのでしようか？ 彼の声を聞こう。彼の許へ行きましょう。わたしはインテリゲンチアの幾人かをさそつた。彼は重大な個々の事例にはほとんど抗議しなかった。自分と同じ職務のメンバーに関しても、また死を予定された人びとの無実を知っていても抗議しなかったのです。だから今だってやらないでしょう。望みなしです。

嘗って革命の松明を担ったインテリゲンチアの男女、思想の指導者達、作家、詩人は、個人的尽力の無効性により動けなくなったわたし達と同じく無力でした。その同志達、友人達の多くは刑務所にすでに入れられるとか追放されていた。そのうちの幾人かは処刑されてさえたのです。彼等は人間の価値の崩壊によって余りにも氣力を失なっていた。

わたしは知己の共産主義者に向い、何かやって呉れるよう訴えました。その或る者は、クロンシュタットに対し、党が重大な誤りを犯そうとしているのを認めました。その人達は、反革命はまったくの作り話の罪つくりだ。みせかけの指導者コゾロフスキーは、水兵達の抗議で何か加えて自分の運命を変える程のことをするには怖わがるぐらいの人だ。それに対し水兵達は立派な気質で、その唯一の目的はロシアの福祉である。帝制の將軍達と協調するなど思いもつかず、社会主義革命派の指導者チエルノフからの救援さえ受けたがらない。外部からの支援を受けつけないのだ。あの人びとは来るべき選挙でクロンシュタットソヴェトに自己の代表を選ぶ権利とベトログラードの罷業者に正義を要求しているのだ：と認めました。

これらの共産主義者の友人達とわたし達は幾夜も過し、語りそしてまた語りつづけた。―でも誰ひとりとして、公開の抗議に声をあげる人はいなかった。彼等が言うのでは、どんな結果に巻込まれるか予想もできない。党から除名され、自分と家族は仕事と配給食料を取りあげられ、文字通り飢死するだろう。そうでなくてもただ消されるだけで、その後の行方は判らなくなるだろう。でも恐怖だけが意志を弱めるのではないのだと、わたし達に確認させました。それは抗議とか訴えが全く無益だからだ。共産国家の戦車の車輪を止めるものは何もない。それは人を踏みしだき、活力を失わせ、声をあげることさえできなくしてしまつたのだ。

わたしはわたし達自身―サーシャとわたし―がその恐ろしい予感に捕われ、同じ状態になり、この人達と同じく無背椎になるのではないだろうか。それに代る何か他のものはないだろうか。刑務所、追放、死でさえあろう。それとも逃亡だろうか！ 恐るべき革命の欺瞞といつわりから逃亡するのだ。わたしがロシアを離れようと思うとの考えは、これまで心にうかばなかった。そう考えただけで自

分で驚きシヨックを受けました。ロシアをはりつけの地にしておくのか！でもわたしは機構の中の一歯車になったり、自由にあやつられる意志のないモノになる位なら一步を踏み出さなければならぬと感じました。

クロンシュタットの砲撃は、昼夜をわかつた十日間つづいた。そして三月一七日の朝、突然、止んだ。ペトログラードを覆った静寂は、前夜の間断のない砲火より恐ろしかった。誰もが苦しい不安に襲われ、何が起き、なぜ爆撃が止んだのか知る由もなかった。その日の午後遅く、あの緊張は無言の恐怖になった。クロンシュタットが屈服し、数万人が殺され、市は血に染ったのです。ネパー河は人の山でした。クルサンテイと青年共産党員の重砲火が河の水を破ったのです。英雄的水兵と兵士は最後まで持場を死守しました。死闘できなかった不運な人びとは、敵の手に落ち、処刑されたり、ロシアの最北端の凍結地へ送られ、ゆるやかに苦しめられました。

わたし達はぼう然自失した。サーシャは、ボルシェヴィキへの信頼の最後の糸をたち切られ、街路をさまよいました。わたしの手足は鉛をつめられたようで、神経は疲れ果てました。わたしはぐつたりと坐りつくしてその夜をみつめていた。ペトログラードは、黒い柱に白い死体となって吊された。街燈はその頭と足許で、ロウソクのように黄色くそよぎました。

次ぎの朝、三月一八日、一七日間に亘る苦悩のため失なっていた深い眠りのあと、わたしは沢山な足音に起こされた。共産党員が隊伍を組み、軍歌とインターナショナルを歌って行進するところでした。その歌声は、以前わたしにとって楽しい響きをもっていたのが、今では人類の燃えあがった希望への葬送歌に聞えた。

三月一八日、一八七一年のパリ・コミューンの記念日は、その二ヶ月後の共和派とガリフェの徒に

よって破砕され三万人のコミユナード（パリ革命政府支持者）が虐殺された。一九二一年三月一八日のクロンシュタットは、それに匹敵するのです。

クロンシュタット「粛清」の全内容は、恐ろしい事件の三日後、レーニン自身によって明らかにされました。共産党第一〇回大会は、クロンシュタットの包囲が進行しているさなか、モスクワで行なわれ、レーニンはいつもの共産党の歌を急拠変えて、新経済政策の讃歌にしたのです。自由商業、資本家への譲歩、商社及び工場労働の私的雇用、これらは過去三年に亘って反革命に位置づけられ、刑務所や死に価するのですが、今ではレーニンによって、独裁の光輝ある旗に書き加えられたのです。即ち、彼はづうづうしくも、この一七日間に党を出入りした人びとの誠実と思想性を評価しました。即ち、ヘクロンシュタットの人びとは、本当は反革命者になりたいとは望まなかった。しかし彼等は同様にわれわれも望まなかったのだ」としたのでした。あの卒直な水兵達は、レーニンとその一党がおごるかに約束したへ全権力をソヴェトへ！のスローガンを真面目に受けとめたのでした。それが彼等の許しがたい罪なのです。その為に彼等は死なねばならなかった。彼等はレーニンが新しいスローガンを書き換える土壌のこやしになって犠牲に供されたのです。それは旧を復するものだった。その傑作が新経済政策、即ちN・E・Pなのです。

レーニンが公的にクロンシュタットについて告白しても、敗北した市の水兵、兵士、労働者の刈りだしはやまなかつた。数百人が逮捕され、チエーカは再び「標的射殺」で忙しかつたのです。

全く奇怪なのは、クロンシュタットの「反乱」に関連して、アナキストは言及されなかつたことでした。けれど第一〇回大会では、レーニンはアナキスト分子を含む「ブチブル」に容赦のない戦争をすべきだと公表した。労働反対派のアナルコ・サンジカリスト的傾向は、そうした性向が共産党

自体的の中に、発展しているからだと言った。レーニンがアナキストに対し武器を執れと呼びかけると、その応答はすぐありました。ペトログラードのグループが急襲され、会員は多数逮捕された。その上、チエーカは、わが陣営でアナルコ・サンジカリズムの部に属するゴロス・トルダ（労働の声）の印刷所・出版事務所を閉鎖しました。わたし達はこの事件の起きる前、モスクワ行き切符を買っていた。わたし達は大量逮捕について知つてから、わたし達もやられるのかどうかもう少し留まってお見ようと思つた。でもわたし達に妨害はなかつた。多分、僅かな有名なアナキストは自由にしておく方が、ソヴェトの刑務所には（盗賊）だけ入つているのだと示すに都合がよかつたからでしょう。

〔訳註〕

*1 クロンシュタットはソ連北西部、フィンランド湾内の軍港で有名なバルチック艦隊の根拠地であつた。

*2 五月一日の大衆集会では次ぎのことが議決された。

- (1) 現在のソヴェトが労働者・農民の意志を代表しない事実を鑑み、秘密投票によつて新選挙を直ちに実施する。選挙の事前運動は、労働者・農民の間で完全な自由煽動運動が認められること。
- (2) 労働者・農民、アナキスト、左翼社会党に対し、言論・出版の自由を確立すること。
- (3) 労働組合及び農民組織に集会の自由を確保すること。
- (4) 労働者、赤軍兵士、ペトログラード、クロンシュタット及びペトログラード地域の水兵達の非党派的会議を少なくとも一九二二年三月一九日までの時点で召集すること。
- (5) 労働者及び農民運動に関連して投獄されたすべての労働者、農民、兵士、水兵は、社会主義党派の全政治犯と共に釈放すること。

- (6) 刑務所及び収容所に入れられた人びとの事例監査のため、委員会を設置すること。すべての政治局 *Politodeli* を廃止する。何故ならいづれの党もその理念の波及に特権を与えらるるか、またはさような目的で政府から財政援助を受けてはならないからである。この代替として、政府により地域的に選出され財政を援助される教育・文化委員会を設置すること。
 - (8) 直ちにすべての *Zagraditelnye otryadi* を廃止すること。（輸送を抑制し、食料その他の製品を没収する目的でボルシェヴィキが組織した武装集団。そのやり方の無責任さと気まぐれは、当時全国で語り草であつた。）
 - (9) 健康に有害な仕事に従事する人びと以外、労働者への食料の配給を均一化すること。
 - (10) 軍のあらゆる分野に配置されている共産党戦闘分遣隊並びに工場の警備にあたる共産党ガードの廃止。もしさようなガード（守衛）または分遣隊が必要ならば、軍においては上級者、工場においては、労働者の判断によつて任命されなければならない。
 - (11) 農民は自分の土地について活動する完全な自由、並びに家畜を飼育する権利が与えられること。但し農民は労働力を雇用することなく、自己の手段で処理できるものとする。
 - (12) 軍の全部門の人びと、わが同志、軍事クルサンティはわれわれの決議に同意することを求める。
 - (13) この後、新聞に経過を発表すること。
 - (14) 管理のための巡回委員会の設置。
 - (15) 個人の努力による自由な小規模生産の認知の件。
- 右の決議は二名の投票棄権を除き艦隊集会の満場一致で認められたものである。

艦隊集会議長 ペトリチエンコ
書記 パーベルキン

右の決議はクロンシュタット守備隊の圧倒的多数によって通過されたものである。

議長 ウアシリエフ

(この項A・ベルクマンの「クロンシュタットの日記」より訳載)

* 3 A・ベルクマンと彼女は反徴兵運動により、カリフォルニアの刑務所へ移送された。
(年譜参照のこと) この時クロンシュタットの水兵達は連帯の意志を表明した。

* 4 Golos Truda (労働の声) は一九一一年米国及びカナダ在住のロシア人労働者組合の機関紙として発行され、主としてフランス在住のロシアアナキストの論文をのせ、第一次大戦中からアナルコ・サンジカリズムの立場をとった。一九一七年アナキスト赤十字会の救援によって、シヤトフとウオーリンがロシアへ帰り、ペトログラードに本居をかまえた。ウオーリン、シヤトフ、シヤピロ、マキシモフが編集を担当。

* 5 チエーカ(Cheka) はフェリツク・ゼルチンスキー(Felix Dzerzhinsky) が長官となり一九一七年二月創設された取締り機関で、非常委員会と呼ばれた。もとは闇市場、サボタージュ、反革命闘争に対し警察を代行するもので「革命では旧時代の裁判や警察は廃止される」あつたが、次第に国家的テロを執行するようになり、レーニンの命令さえきかなくなつたと言われる。

* 十月革命一九一七年十月、ボルシェヴィキは武装蜂起して、二五・二六日の両日、ケレスキー内閣を崩壊させた。

へロシアにおけるわたしの幻滅より